

子母澤寬

勝海舟
第六卷

明治新政

新潮社版

勝海舟 第六卷・明治新政

昭和四十年六月十日印刷

昭和四十年六月十五日発行

著者 子母澤 寛

発行者 佐藤 亮一

印刷所 三晃印刷株式会社

製本 新宿加藤製本所

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(260)一一一一(代)

振替東京八〇八番

定価四三〇円

型丁本はお取りかえいたします

勝
海
舟

第六卷・明治新政

児 戯

しかし益満はやがて、また何処かへ出て行くようであつた。台所口から表へ廻ったところで、

「益満先生、益満先生」

と呼ぶものがある。

「誰だえ、こんなところでおいらを先生なんぞとからかっている奴は——ほう、お前さんらか」

益満は、前へ出て来た二人の武士と対い合つた。

「どうもわれわれ困りました。上様の御命によつて、こうして勝先生の護衛という事で参つたが、先生は少しもわれわれを傍へお寄せなさらない。とんと邪魔者扱いでわれわれの方もまたさらに先生の行動がわからないので、護衛も何も出来んです。これでは実に困る。もし先生に万一の事でもあつた際は、勿論われわれにその責がかかりますが、われわれ護衛をしていての事であればその責を負つて少しも残念には思わないが、こう毎日手を掛いていて、そんな事では、死んでも死切れんということになる。なんとか一つ、あなたから先生へお話を願われんどうか」

「重々御推察は申すが、何しろ名代の臍の曲つた先生だ。益満位が何を云つて見たところで、対手にされるもんじゃあねえ」

「しかし、われわれ実に取りつく島もない。どうしたらいいものでしょう」

「まあ、五人雁首を揃えて、も一度誠意をもつてぶつかつて見ることだね」

「そうですか」

二人はひどくがっかりした様であつたが、しかし、それから間もなく、この五人は、勝の居間に、ずらりと所謂雁首を揃えて坐つていた。

一人は涙を一ばいためて、両手をついてうつ向いたまま、身動きもせず、じつとしていた。

「よし。それじゃあ、おいら、いいものを書いてやるよ」
勝は、机へ向つて、すらすらと筆を走らせる、と、

「これを持って、銘々屋敷へけえつて居れ。お前らに命じた高橋伊勢守が水戸からけえる時あ、もう護衛もへつたくれも要らなくなっているだろう」

一人は平伏しながら、その一紙片を頂戴した。

「読んで見な」

「は」

いたつきは、

我身を捨てて去りぬめり

残るいのちぞ

物笑ひなる

護衛謹而拝辞実証也

慶応戊辰四月

勝 義 邦
「花押」

その日暮れ方から、ひどい北風になった。晴れてはいるが、また雹でも降って来そうな寒さだ。

四月も半というにとんだ馬鹿な気候だ。

勝は、蔵い込んである綿の入った丹前をわざわざ奥から引張り出させて、これを着込んで、火鉢まで持出させ、それを手許に、頻りに何か書き物をはじめている。

上様を水戸へお送りし、江戸城を引渡して、肚ん中では一体何をどう考えているのか、けろっとした面つきをして、日頃よりはいっそう落着いて、しかもまるで老込みでもしたような恰好だった。

丁度五つ時分であった。海軍所から、馬で飛んで来た者がある。知らせを受けて、勝は自分で玄関へ出て行った。榎本副総裁が、徳川海軍艦船七隻を率いて、品川を館山湾に向けて脱走したとの知らせである。

「おい、誰がおいらんところへ知らせろと云ったえ」

「はあ、軍艦頭伴鉄太郎殿、取敢えず勝軍事御総裁までとの命でありました」

「伴か。あ奴あ馬鹿だね。海軍総裁の矢田堀へ知らせろ。軍艦が脱走しようがしめえが、おいらの知った事か」

「は。しかし矢田堀総裁は、何れにか蟄居の御様子で、朝

来、御行衛が知れぬ由で御座います」

「ほう。矢田堀が姿を晦したかえ」

「は」

「副総裁は海上、総裁は陸上で姿を隠したんじゃあ、海軍も大べら棒になったもんだ。とにかく、伴に、ちょっと、おいらがところへ来るように、そういつてくれろ」

「は。承りました」

使者が帰って、一刻程した。もう四つに近い。風はいよいよ吹き募った。

勝は、今度はまた丹前を頭から引つかぶって、入って来る伴をじろりと上目遣いに見ながら、

「お前、何故脱走しねえ」

といった。伴は、

「恐らくは先生が脱走なさらぬのと同じ理由でしょう」

「こ奴が」

勝は、はじめて、にっこりして、

「矢田堀あ、何処へ行つたんだ」

「わかりません。副総裁とはずいぶん度々議論をしていられたんですが、遂に袂を分つたという訳でしょう。昨日も互に口角泡を飛ばすという次第で、副総裁に向つて、世界の大勢は、断じて国内の私闘を許さない筈である。貴下は海外に留学してその情勢を詳らかにせらるるに、今に及んで何が故に妄挙を敢てせんとするのか、と申して、幾度か副総裁を止めたようでした」

「ほう。そこ迄あ上来たが、姿を晦ますは妙じゃあねえか」

*

「かねて御承知のように、お気の弱い方ですからね。ひよつとしたら責を負つて、何処かで自決されたのではないかなどと、所内では噂している者もあります」

「いや、あの人あ死ぬねえ。その中に、何処からか、ひよつこり現れて来るだろう。まあ放つて置け」

「は」

「が、榎本あ、何々を引っ張つて行つた。乗組あどんな手合だ」

「観光、蟠竜、咸臨、朝陽、富士山、回天、開陽それに翔帆を連れて行きました。乗組凡そ二千人、軍艦頭荒井郁之助、同並沢太郎左衛門、甲賀源吾、松岡盤吉の諸氏」

軍艦頭は何れも禄高二千石。

「荒井が行つたかえ。あれあ矢田堀には叔父甥な筈だが、矢田堀たあ反対かえ」

矢田堀は元々奥州桑折十万石の代官荒井清兵衛の舎弟。

荒井はその子で黙つていれば十万石支配の代官様になれる身分の男だから、勝はそれを思い出して云つたのだろう。

「いずれにしても、明日夜が明けられあ、品海に一隻の艦影もない、官軍の驚きようは思われますが、どんな事になりましようなあ」

「面白いだろう。おいら高見の見物だ」

「と申されても、矢田堀さんが姿を晦した上は、結局は、

先生のところへその尻が参りましょう」

「滅法者め。おいら、知るかえ」

伴が元氷川をかえつて間もなく、ひどい風の中を、鶏が曉を告げた。

城から、第一番の使者の来たのは、六つ半頃であつたろう。しかし勝は、腹痛臥床と称して、今日は登城不可能を伝えさせた。それから殆んど半刻おきに、いろいろな人が使者に来た。が、勝は依然その使者に逢おうとしなかった。

しかし、海軍先鋒から、一時徳川家の代表となつている田安德川慶頼へその違約を厳しく談じ込んで来ている。慶

頼はすっかりその応対に窮している様が手に取るようにわかった。

肥前藩の夏秋又三郎がやって来たのは、もう八つ頃であった。勝はすぐに逢った。

「どうしたものでありましょう。少々、穩かではない事態ですが」

夏秋はそういつて、眉を寄せた。

「だから、海軍のことあ、あたしやあ引受けられねえと云ったのさ」

「先生はそれで済ましていられても、徳川家としては、朝廷欺罔の罪は免れないでしょう」

「と云って、おいらにも、策はねえね」

*

「しかし、結局は先生が御出馬なさらんでは覺がつかぬことでしょう」

「馬鹿あいうな。海軍總裁という歴としたものがある。そ奴が雲隠れしたからとて、こっちへ尻を持って来る、世にそんな大べら棒があるものか。ここ迄来ねえその中なら、おいらが引受けねえ事もなかったろうが、事竝に及んではもう駄目よ。そんな事、おいらをおだてて扱わせようなんぞは、子供だまし、児戯という奴だわさ」

「先生のお目から見では児戯であっても、要は天下の為で

す、先生がお立ちなさらんではいけません」

「いやなこった。勝あこれでも四十六歳。餓鬼じゃあねえよ」

「大原卿が大層な立腹で、どうなる事かと心配でここへやって来たのですが、そう先生に云われては、これは困った事だ」

「榎本の軍艦を追つかけて、征伐するさ。が、こ奴あ、ちとむずかしいよ。榎本がああ通りの阿蘭陀仕込の奴で、さようさ、軍艦七隻で、砲は大小ざっと八十三四門はあるからねえ」

「天下これより再び乱るとあつては、朝廷に対して実に申し訳ないと思いますからなあ」

「お前、そういつて、城御預の田安家へ談じ込みな」

流石の夏秋にも、どうにも仕方なく戻って行つた。それからまた田安家からの使が五六度もあつて、その日は風の中に終つた。

次の日は早朝から、目付が使者に来た。田安家徳川慶頼の直書を持って来たのだ。勝に、軍艦の事をどうか宜しく頼むというのである。

勝はそれに対し、

「麟太郎の微力ではどうにもこの事態を收拾出来ませぬ」
こう少しばかり剣もほろろの挨拶であつた。

風は引きつづき吹いていたし、時々ばらばらと大粒の雨
さえ交ったりした。

次の十六日午の日は、やっと晴れて、びたりと風も止んだ。が、やっぱり冬のように寒い。

勝は相変らず、丹前を引っかぶって、縁側へ出てぼんやりと庭を見ていた。どうした風の吹廻しか、近頃にはとんと珍しい図だ。

庭の奥の方、盛徳寺の墓地の横に沿ったところに、去年は一つも咲かなかった木瓜が、可愛らしい淡紅色の花を一ぱいにつけたのである。どうやらそれを見つけた様子だ。

「おうい、おたみ、おたみ」

と勝は出しぬけに大きな声で夫人をよんで、

「ことしあ木瓜の果が出来るねえ」

といった。おたみはすぐに出来たが、ただ黙って笑っているだけであつた。

勝は秋になると出来た木瓜の果を真っ二つに割って、よくそれを机の上へ置いて座敷中へ漂う匂をよるこんだし、その砂糖漬も好きであつた。

客が来た。

*

取次のお糸が戻つて来たが、やっぱり丹前を引っかぶつたまま、縁側で木瓜の花を見ながら、勝は、そっちを見向

きもしなかった。

お城から、大久保様のお使で、お目付橋詰正一郎様が見えてございます。が、通せとも通すなとも言わなかった。

しかしお糸は、引返して、橋詰を客間へ通した。瘦せたひょろりとした四十五六の小鼻のつんとした人である。

勝は今度は、庭下駄を突っかけて、木瓜の木の下へ行つて、花を見ている。おたみは少しの間は、逆らわずにいたが、余り、待たせるようなので、とうとう堪り兼ねてか、自分もその傍へ行つて、御役で見えられたお方でございますから、お出ましなされた方がおよろしいで御座いますよ、うという顔をする、勝は、やっと、身仕度をして、のそりのそりとして行つた。

「軍艦の事だろう。それなら、勝にはなんとも策がありませんと、大久保さんへお答してくれろ。海軍が一人残らず脱走でもねえだろう。一体係諸役の奴ら、三度の飯を何処へ喰らうていやがつたんだ」

立つたままそういうのを、橋詰は引受けて、

「わたくしも全く左様に存じます。あなた様への御使は筋違い、わたくしも一度は御辞退を申しましたが、実は――」

「勝はね、のろま役人の尻拭いをする為に生きているんじ

やあねえわさ。蟻殻町の矢田堀讀岐守の屋敷へ踏込んで調べて見ろ、あ奴あきつというよ、あ奴に始末をさせろ」

「いや実は——」

「ほんとに馬鹿にしてやがるな。海軍所には木村兵庫頭もいるし、支配組頭の庄田主水もいるじゃあねえか。取調役の組頭にだって人はあらあさ、え。軍艦頭が一人残らず脱走したとしても、その他に海軍に職を奉ずるもの凡そ五十名。そ奴らの中には、命がけて脱走を喰い止め、大義名分を説く奴あねえのか」

「一々御尤です。しかし、実は——」

その三度目の——実は——にやつと勝は気がついたのだろう。そこへ坐つて、相手の言葉を待つようであつた。

「東海道先鋒総督府から御書付が参りました。とにかく一応御覽をいただいて、その上での御趣旨は橋詰帛城、口上仕ります」

「大総督府からだとえ。誰への御書付だ」

「田安中納言様御宛ではございますが、中に、大久保様及びあなた様お名前がございます」

いくら、大むくれにむかれていても、勝と云えども、この御書付は、見ぬという訳には行かない。

*

軍艦引渡一件ニ付テハ、水夫迄モ可差出趣申立、一々御

許容相成、到期日逃去候次第、欺罔ノ罪ヲカサネ、夫而^ヲ已ナラズ格別ノ御仁慈ヲ以テ、寛典ノ御処置悉ク水泡ト相成行ハ、勿論ノ事ニ候

就テハ海軍先鋒ヨリハ、可相応艦ハ無之候得共、其責難免候ニ付、死ヲ以及談判度趣モ被申出、当然之儀ニ付、右様果決相成候テハ、徳川氏家名ハ勿論、万国之賊船ト相成候次第、不便之事ニ付、品海へ乗戻シ、官軍へ引渡候迄之処、往事ハ不相咎、大久保一翁、勝安房へ御委任可被仰付候間、一向尽力イタシ候様、可被申付候事。

勝は、この書付を披見して、そのまま、じつと瞑目した。その目の中に、榎本釜次郎が、旗艦開陽丸の艦上から号令して、幕艦悉く波濤を蹴り、風を侵して、房州へ向つて行つた様が、絵のように映る。

「官軍へ引渡すまで、往事は咎めずか。おい、大久保さんはなんといつていたえ」

「はあ。勝さんへすがるより手はないと仰せでありました」

「だがこの御書付はいつ来たのだ」

「昨夜深更と承りました」

「今あ何刻だ」

「かれこれ五つ半近くでありますうか」

「それ迄、この御書付は何処にいたのだ」

「それは存じません」

「べら棒奴、御覧な、総督府では、深更でもこういう御書付を下さる程、参謀以下、夜も昼もなくみんな一生懸命だ。それを受けるこつちがやつと今頃、見るようであるんだ。役人がみんなこれだから、徳川の天下が引っくり返った。勝安房とも云われる奴が、今頃のろのろとうろつき出るのあ、お天道にみつともねえ、出るのあいやだ」

「御尤です。しかし天下の事はかかつて、あなた様と大久保様のお肩にある。大久保様も、今朝これを御覧なされた由でありますから、徳川家諸役の積弊は積弊と致しましても、この際、あなた様の御尽力をいただかなくては、折角泰平の中に、今日に至りました御苦心も水泡に帰し、徳川家への御寛典も取消され、ましてや脱走の諸艦は、国に籍なく、海賊船も同じことと相成りましょう。見解に誤りがあるものと致しましても、元、徳川純忠の士、一片の御同情を垂れ賜らんことをお願いしたいものでございます」

「いやだよ。総督府へ、勝は辞退いたしやしたと、大久保さんからお届下さるよう、お前さん、けえって口上しておくれよ」

「はあ」

橋詰は、そういったが、席を立とうとしなかった。余

つ程、大久保一翁に云われて来たのだろう。

*

しかし、どう、こてて見たところで、自分が出なくて、納りがつかないということは、当の勝でもわかつているのである。

どうでも榎本を説いて軍艦を引戻さなくては、これ迄の血を吐くような苦心がみんなふいになる。官軍と徳川との関係が根っこから打壊れるのは知れた事である。誠実で、生真面目で、策も何もない大久保一翁が、すっかり弱っているだろうと思うと、勝は、橋詰へぶつけるように、

「仕方がねえ、おいら、榎本に逢って見る」

そう云ったのはものの小半刻も二人の重い沈黙がつづいた後であった。

橋詰は、大よろこびで、早々にそこを立った。それと同時に、勝は出かけの仕度を命じ、馬も玄関へ廻すように、

「握飯も四つ五つ拵れえろよ。中は梅干で沢山だ」

と大声で命じているのが、まだ玄関にいた橋詰の耳へ追っかけて来た。

その日、幕府の軍艦は、堂々と舷を並べて房州館山湾にかかっていた。風は引つづいて吹いている。空は晴れてはいるが、風に乗って、白雲頻りに飛び、ひどく寒い。

旗艦開陽をはじめ七隻の舷側には、大きな波が音を立て

て咬みついてはいるが、流石に軍艦びくともしない面がま
えは、立派なものだ。それにもまして、波の間を見えつ隠
れつ、何やら頻りに艦へ運ぶ荷役舟の船頭達の達者な腕は
見事なものである。

開陽には榎本和泉守をはじめ、軍艦頭荒井郁之助。同並
沢太郎左衛門。士官七名、見習二十一名。水夫小頭十人、
平水夫二百十五人、火焚小頭四人、平火焚三十六人。

富士山艦には頭並柴誠一。士官五名、見習二十一名、蟠
竜には同じ頭並の松岡盤吉以下。朝陽には云わば艦長とも
いうべき頭並はいなかったが、回天には甲賀源吾が頑張っ
ていた。

沢は慶喜が大阪を逃出した時に、その乗艦を天保山沖で
ぐるぐるひん廻して一と文句も二た文句も並べる位の直参
には珍しい人物。ましてや長崎にも留学し更に榎本と共に
阿蘭陀に留学し火薬砲術の研究をして来た新知識だし、荒
井も蟠竜の松岡も、回天の甲賀も肝の太い事では滅多に人
には負けぬ人達である。荒井は後の中央氣象台長。松岡は
長崎留学第二期生で、非山の江川太郎左衛門の家来だが、
明治四年東京の獄中に死んだ。甲賀は遠州掛川の出身で、
一時、矢田堀に師事し、のち荒井を師としたが、同年宮古
湾襲撃で自ら陣頭に立って指揮し、負傷して尚お屈せず、
艦の帆柱へからだを縛りつけて指揮をつづけつつ絶命した

という勇将だ。

荒井と沢が丁度甲板に立っていた。四辺に人がいない為
か頻りに額を寄せて話をしている。

「兵器弾薬も、上野にいた遊撃隊有志の奔走で、あれだけ
積めば先ず安心というものだ」

荒井は快然たる微笑であった。

「ここで食糧の補給が出来たら、総裁の仰せの通り大阪に
直行し、兵庫を根拠として大いにやる。実に愉快々々」

沢もそういつてにやにやした。

*

「しかしこれから世の中も愉快な事になるな。われわれが
兵庫を本拠とすれば、上方の諸藩はもうびくともする事が
出来ない、一隊は馬関に送って長州を討ったら、九州中国
はこの一撃で手も足も出なくなるだろう」

「そうして置いて一支隊で突如として、薩州をつくという
昨夜の総裁の案は、わたしも実に然りだと思えます」

「ところで今日は、七つ位迄には、錨アンカーをあげたいが」

「大丈夫それ迄には、十分積込を終りましょう」

沢はそういつて、ふと、波の彼方に瞳をすえた。

「荒井さん、妙なものが来る」

「何？」

「押送舟が矢のように来るが、どうもこの艦へ向っている

ようだ。なんであろう」

「さあ」

二人は立ち上って、その方へ向き直った。

如何にも、十八挺櫓の押送が、波がしらを引裂くような勢で、真っ直ぐに、開陽へ向って来るのだ。

何処で見たものか、若い士官達がどかどかどかどか二人の側へ集まつて来た。

「なんでありましようか」

人々の間に、沢は笑いながら、

「敵か味方かのどっちかに定まつている。味方なら大いに歓待、敵なら叩つ斬る迄のことだ」

「おや、妙な人間が乗つて居ります」

沢はまじまじ押送を見て、

「ほほう。如何とも妙な奴がいるようだな——どうです荒井さん、頭からすっぽりと赤の毛布を引っつかぶって、洋傘をさしている。何者でしようか」

「そうさ」

荒井はにやつとして、

「あの風態は並の人ではないな。さあ、誰だろう」

「誰でしょう」

「当てようか」

「はあ」

「勝さんだよ、勝安房守だよ」

「何、勝さん？」

「先ず脱れっこ無しだろう」

「赤毛布、洋傘——そうです、仰せの通り勝さんかも知れませんな。しかし、勝さんに来られては甚だ拙い」

「拙いが考えて見ると、ここら辺りで、ほんに勝さんが面を見せそうなところだ」

「どういう趣旨で来たのであろう」

「先ず、ここんところはおれに任せてみんな品川へ戻れというだろう」

「飛んでもない！」

沢は、ぼーんと一つ、力一ばい強く甲板を蹴った。

*

「まあ、静かにしようではないか。勝さんがやって来はせんかということは、榎本さんも心配していたところだ。だから、一刻も早く錨をあげたかったのだが、もう少しの惜しいところであつたな」

「しかし、われわれには予ての盟約がある。今、ここで勝さんが来ようが、誰が来ようが、今更初志を翻すこともないでしょう」

「それあそудだともさ」

艦底から大急ぎで七八人、甲板へ飛出して来た。これへ

乗っている陸軍の遊撃隊長人見勝太郎が筆頭だ。

「勝安房守が来たと？」

「あれが勝さんだ」

沢が指さした。

「狸勝、腰抜け勝がとうとう此処まで化かしに采ましたか」

「赤毛布、洋傘、あの異様な扮装が、即ち勝さんだ」

人見は、眼を皿のようにしながら、

「沢さん、われわれは覚悟がある、勝は斬るつもりだ」

「斬る？」

「不憫だが斬る。ここ迄追って来られては斬るより外に手は無い。われわれ遊撃のものは、左様定めている」

「そうですか、それもいいでしょう」

「仮にこの開陽にいるわれわれがそれをやらぬにしても、他艦に分乗の同志が承知をしますまい」

二人の会話を荒井は少し困ったというような表情できいていた。剛腹だが、根が穩健な郁之助に見れば、それ迄に思い詰める事は出来なかったのかも知れない。

押送は次第に近づいて来た。

艦の人々は、異様な緊張と共に、何れも重く唇をとじて無言をつづけた。

遊撃隊の人達は刀の欄かに手をかけて、いざという心構え

をしている。

押送が、びったりと艦の舷側へくっついた。ぱつと毛布をぬぎ捨てた。正に勝麟太郎。風が、水髪の髻をばらばらにする様に吹き捲った。頬から口へかけて、一刷毛したような姿になった。

洋傘も捨てた。そして、すつと立つと、

「釜さんはいるか。おい、釜さんはいるか」

艦上からは、誰も答えなかった。

「榎本の釜さんはいねえのか」

勝は鋭い声で怒鳴った。大きなよく通る声だ。

*

勝は、ひらりつと押送から、開陽の艦梯へ飛移った。凄目つきで、甲板の人達を睨みつけながら――。

「釜さんは何処にいる。勝が来たと取次げ！」

しかし、その時は釜さんこと榎本和泉守は、金モールの徳川海軍士官の軍服で、すでに、甲板に出て来ていた。

勝は悠々として艦梯を上る。その頭が、ひょいと甲板へ出た時、榎本は隊長へ命じてそこに立ち並んだ水兵へ、

「捧げー銃」

と、号令をかけさせた。ずらりと並んで、しかも整然たる捧げ銃。

一同は、はつと気を吞まれた。そこへぬうーつと勝安房

守。そして突立って、じろりと甲板一帯を睨め廻した。

麟太郎もはっとした。そして、榎本をはじめ郁之助や沢が丁寧な会釈するのに引込まれて、自分も鄭重な会釈をした。

勝は、いきなり大声で怒鳴りつけた。

「そこにいるのは、遊撃の人見じゃねえか。貴様、なんの為にこんなところへ来ているんだ。馬鹿もいゝ加減にしろ」

榎本が、そこへ割って入るようにした。そして、

「勝先生、まあ、どうぞこちらへお出で下さい」

と、手を出して案内した。勝にここにいつ迄もいられてはどんな騒動になるかも知れない。早くもその気配を察したのだから。

「よし」

勝は、も一度、一同をじろりと睨みつけて、そのまま榎本について、艦内の艦将室へ案内されて行った。

みんな、ぞろぞろ随いて行った。榎本はそれに向って、「わたしがお話をするから、諸君はどうか暫くの間、静粛に待っていて貰い度い」

そう云ってから、静かに艦将室の扉を閉めた。

荒井も沢も人見も、一時、顔を見合せたが、こうなると扉を押して入る訳にも行かない。黙って、石のように固くそこに待っていた。

薄暗い艦内に、じりじりするような刻が流れて行った。

小半刻。「何しろ人を喰った勝だ。総裁がどんな餓手にかかるかも知れない」

「真逆と思うが、気がかりな事だ」

「腰抜け勝奴、今度こそ叩いて斬ってやる」

そんな人々のささやきの中から、突然、誰やらが、
「大義滅親、大義滅親」

と叫んだ。

「おう」

それに応じたものがある。

途端に、すうーと艦将室の扉が開いた。

葱坊主

みんな、はっとした。榎本総裁が顔を出した。

「御一統こちらへ入られるように」

荒井を先頭に、どかどかとして行った。人見はさっき勝に怒鳴られて、流石に少しじろいではいるが、腹中満満の不平は、頬を蒼くしている。

が、勝は、さっきとはがらりと変って、悠々と椅子によつて落着き払い、しかも、ひどく上機嫌でにこにこしている。

「やあ、どうも、若いもの、みんな元気でいいな。しかしまあ、元気に任せて方向を誤ると取かえしがつかぬことになるから、その辺はよろしく自重を頼むよ。それについても、氣候がこんなではお互に寒くて困るではないか」

そんな事を云って、今度は静かに立上ると、

「委細は釜さんに話しておいたから、くれぐれも輕挙はせんようにな」

もう歸りかけた。

「さいなら」

勝は、とぼけた顔つきでみんなへ、べこりとお辭儀をして、そのまま扉の外へ出たのである。

榎本がうしろにつき、それから、みんな、なんだか、狐にでもつままれたような恰好でぞろぞろついて、甲板へ出た。

水兵は、勝の姿を見ると、また一斉に捧げ銃をした。榎本が命じて置いたのであろう。

風が一頻り吹いた。

「おう、寒い寒い」

勝は、そういつて、にこにこしながら、艦梯を降りて行く。

押送は、やがて、また赤毛布をすっぽりと頭から引っかけた勝をのせて、開陽を離れた。

みんなは、この時はじめて、ほっとして、改めて榎本の顔を見た。殆んどみんな一緒であった。ひょっとして、勝に説服されたのではないだろうか、こうした心配は、一人残らずの胸にあったのだらう。

「御一統、艦将室へ来て下さい」

榎本が先で、そのまま艦将室へ引返した。

榎本は一番奥へ立ったままであった。

「諸君に於て、是非、この榎本の説に従って貰わなくてはならぬことに相なった」

先ずそう口を切った。

「何？」

人見が思わず、声を出したのである。

「曲げて、暫く忍んでいたかなくてはならぬ事に立到った。どうか、悪しからず、承知をして貰いたいと思う」

「ど、どういう事でありますか」

穂かだが、きつとした調子で荒井が一步前へ進んだ。

*

訊く荒井にも、大体の事の成行は、想像されたし、沢も人見も、やっぱり、ははあん、とうとう勝の手にのって終ったな、そんなものがびーんと来た。からだ中が、燃えるように熱くなつて行つた。

榎本は荒井の言葉には答えず、